

# 頼三樹墓碑考

——金輪寺文書を中心きんりんに

安藤英男

## 目次

はじめに

一、三樹の四つの墓碑

二、大橋黙仙の人となり

三、三樹と黙仙の交流

四、金輪寺の墓碑

はじめに

頼三樹は、頼山陽の第三子(山)で、諱は醇、字は子春、又は士春、号は鴨厓・百城・古狂生など、通称は三樹三郎、三木三郎、三樹八郎、三木八、或いは三樹といった。文政八年（一八二五）五月、京都に生まれた。八歳にして父に死別した。はじめ父の門人・児玉旗山に預けられ、旗山の没後、やはり父の門人・牧百峰、後藤松陰らに従学した。十九歳の時、幕臣・羽倉簡堂の世話で、昌平坂学問所に入った。間もなく簡堂が失脚して、保護者を失なったが、学問所に止まること三

年、二十二歳の時、出奔して蝦夷地へ渡り、北辺の情状を視察した。

嘉永二年（一八四九）、二十五歳の時、数年ぶりで京都へ帰り、翌年、父譲りの真塾の看板を掲げて、経学の帷を下した。<sup>(2)</sup>時に国歩多端、四方の有志に交わり、盛んに国事を談じた。安政期に入ると、遂に幕政改革の運動を起こし、父の旧友・梁川星巖を盟主に推し、大いに朝廷に入説した。安政五年（一八五八）、井伊直弼による弾圧が開始されると、池内大学の密告にあつて<sup>(3)</sup>就縛し、翌年十年、小塚原に戮せられた（安政大獄）。享年三十五。

もと頼三樹は、丹波亀山なる金輪寺<sup>きんりん</sup>の住僧・大橋黙仙と極めて親昵であつた。金輪寺には三樹の墓碑がある。また、黙仙は当時の志士たちと往来している。そこで、これらの関係について、金輪寺文書を中心に、いささか探究してみたい。

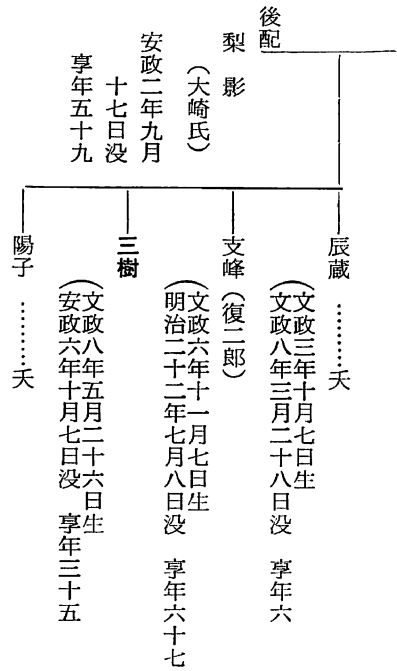
〔補注〕

(1) 頼山陽の第三子

頼山陽には四男・一女があつたが、成人したのは聿庵（余一）、支峰（復二郎）、三樹の三子であつた。



(2) 三樹の開塾



嘉永三年（一八五〇）正月、三樹は母と共に姉小路お池下ル所へ転宅し、三月、ここで開塾。最初の門人として、薄井龍之（号は小蓮、字は飛紅。信州伊那人。後年の大審院判事）が、村瀬藤城の紹介で入門している。安政四年（一八五七）十月、兄の支峰が水原学問所の勤務をおえて帰京し、手狭になったので、高倉通六角南へ転宅し、この家では三樹は二階に書齋をおき、支峰は下において別々に塾生を取ったという。しかし、やがて三樹は河原町二条上ル夷町に移って一家をかまえ、この家で幕吏に拘引された。

(3) 池内大学の密告

三樹就縛の日付には諸説があるが（後段三項、補注8）その就縛のきっかけが、池内大学の密告であったことはほぼ間違いないまい。

たとえば、安政五年十二月十九日付、宇津木文之丞が長野主膳に答えた書状に、「大切之大巻物投書、池内大学え上書見せ候處、三樹八郎之手跡なりと申候に付、早速頼御呼出し御吟味に相成候よし」（徳富蘇峰著『近世日本国民史』第四十二卷、一二七一—一三〇頁所収）と。また、審問書にも、「殊此もの（池内）申口ニ而、一件之もの共、犯科之次第も速ニ相分候儀ニ付、惣て僉議事有之」（同上、三六八頁所収）等とある。

## 一、三樹の四つの墓碑

安政の大獄で処刑された頼三樹には、次の四カ所に墓碑がある。

(イ) 回向院（小塚原）

東京都荒川区南千住五ノ三三

（元、武蔵国豊島郡三ノ輪村）

(ロ) 松陰神社（世田谷）

東京都世田谷区若林四ノ三五

（元、武蔵国荏原郡若林村）

(ハ) 長樂寺（京都東山）

京都市東山区鳥居前東入る円山町六九二

(元、山城国愛宕郡粟田口村)

(二) 金輪寺 (亀岡)

京都府亀岡市宮前町宮川上王三

(元、丹波国南桑田郡宮前村)

まず、これら建碑の経緯を訪ねてみたい。

安政六年（一八五九）十月七日、頼三樹は伝馬町の獄において処刑され、遺骸は南千住の小塚原に棄てられた。三樹と同時に処刑されたものに、橋本左内と飯泉喜内とがあった。このうち、橋本・飯泉の遺骸は、その姻族の手に葬られた。しかし、三樹の遺骸のみは、誰も引取り手がなかった。

当時において、頼山陽の旧門生で、三樹とも関係が浅からず、しかも江戸に在った者には、関藤藤陰（諱は成章、字は君達）、江木鰐水（諱は戡、字は晋戈）などがあった。彼らは何れも福山藩士で、或は藩侯の顧問に備えられ、或は学政を綜理するなど、当時は相当な地位に就いていた。彼らは藩邸に在って、三樹の身を按じてはいたが、後難を慮って遺骸に近づくことが出来なかった。

この時、江戸の日本橋村松町で、思誠塾という名で経学の帷を垂れていた大橋訥庵（諱は正順、字は周道。当時四十五歳）が、これまで頼家とは何の交流もなかったにも拘わらず、あえて塾生を従えて小塚原にいたり、幕吏に乞うて三樹の遺骸を貰い受け、水を汲んで屍を洗い、帛衣を被らせて棺に入れ、同地の回向院に鄭重に葬った。これは当時、訥庵に従って刑場に赴いた森退蔵の実記である。

この一挙は瞬く間に洩れ拡まり、訥庵を知るも知らぬも、その義心を讃えたが、幕府はこれを甚だ苦々しく思った。訥庵の知友・佐々吉甫（本姓は楠本。諱は孚嘉、号は碩水。肥前針尾の人。佐藤一斎の門人。大正五年十二月病没、享年八十五）が、これを以て事を好み名を求むる所以なりとし、再三忠告したのに対し、訥庵が答えた文書（復佐佐吉甫書）<sup>(3)</sup>があるが、これには訥庵の心事が委曲を尽して述べてある。

昨接手教。縷忠告。足見足下不苟一事矣。近日僕之欲収三樹遺屍、非因江木生囑也。僕惻隱之情所致也。足下蓋誤聞、以爲江木生囑。故云云耳。來論又謂。三樹學雜而識淺。有損于此道、而無益于天下後世。豈有關於名教哉。而今有此舉者、或爲江木生所欺。其然。豈其然。

夫三樹者一介書生。其學其識不足論者、僕雖至愚、亦明知之。豈謂其所爲有關於名教哉。然而僕今圖此舉者、聊有說也。蓋三樹者雖一介書生。不足論、非賴山陽之子乎。山陽者雖雜霸之儒、無交涉於聖學、非平安一時之名家乎。而使三樹遺屍、委狐狸食之、蛄蛄噉之。僕非獨爲三樹不忍、竊爲山陽不忍也。雖然三樹果爲不軌亂民乎、雖其人識字講學、如大鹽平八、僕固不欲収其屍也。果非不軌之亂民乎、雖乞丐流氓之屍、僕將急急出力以殮之。況於一介書生乎。況於名家之子乎。此僕之所以惻然動情也耳。

況一日三人遭刑。而其二則爲姻族所葬。獨三樹無収之者。爲狐狸所噬嚼。是豈仁人君子之所忍聞乎哉。況乎前日遭刑者、其心術未可的知。而其間憤夷狄跋扈・神州陸沈、以犯諱忌者、亦必有之。僕聞山陽爲人慷慨、每言及延元南狩之事、未嘗不流涕。然則三樹之觸刑網、亦安知非憤夷狄跋扈・神州陸沈之過哉。此又僕之所以惻然動情也耳。

但僕之於<sub>二</sub>山陽<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>師弟之契<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>三樹<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>朋友之誼<sub>一</sub>。故欲<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>江木生任<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>。而生柔懦逡巡不<sub>レ</sub>果。僕於<sub>レ</sub>此乎。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>捐<sub>レ</sub>資以處<sub>レ</sub>之也。是故僕之圖<sub>二</sub>此舉<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>名也、非<sub>レ</sub>徼<sub>レ</sub>利也。不過<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>忍之情<sub>一</sub>。則未<sub>二</sub>始表<sub>二</sub>褻賤名<sub>一</sub>。竊使<sub>二</sub>醫生某者代當<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>。必無<sub>下</sub>觸<sub>二</sub>嫌忌<sub>一</sub>、懼<sub>二</sub>禍患<sub>一</sub>之理<sub>上</sub>。僕雖<sub>二</sub>學問迂疎<sub>一</sub>、聞<sub>二</sub>明哲保身之說<sub>一</sub>久矣。豈敢漫然買<sub>二</sub>禍患<sub>一</sub>、以爲<sub>二</sub>江木生所<sub>レ</sub>瞞哉。足下幸勿<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>念。嗚呼、人之所<sub>レ</sub>見、或有<sub>下</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>遽歸<sub>一</sub>之於一路者<sub>上</sub>。足下視<sub>二</sub>僕之舉<sub>一</sub>、而僕不<sub>レ</sub>肯<sub>二</sub>飄然改<sub>レ</sub>轍者、洵有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已耳。第足下之言、蓋出<sub>二</sub>於忠厚之意<sub>一</sub>。則不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>鳴謝<sub>一</sub>。是僕之所以傾<sub>二</sub>瀉鄙衷<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>疏緣由<sub>上</sub>也。足下幸諒照焉。

小春。大橋順拜。佐佐賢契足下。

### 〔訓み〕

昨、手教に接す。縷々忠告。足下の一事を苟くもせざるを見るに足る。近日、僕の三樹遺屍を収めんと欲せしは、江木生の囑に因るに非ず。僕、惻隱の情の致す所なり。足下、蓋し誤聞して、以て江木生の囑と爲す。故に云々せしのみ。來論に又謂う。三樹、学は雜にして識は浅し。此れ道を損する有りて、天下後世を益する無し。豈、名教に關わる有らんや。而して今、此の挙有るは、或いは江木生の欺く所と爲る。其れ然らん、豈、其れ然らんと。

夫れ三樹は一介の書生。其の学、其の識、論ずるに足らざるは、僕、至愚と雖も、亦明かに之を知る。豈、其の名教に關わり有りと爲す所ならんや。然れども、僕、今此の挙を図るは、聊か説有り。蓋し、三樹は一介の書生、論ずるに足らずと雖も、頼山陽の子に非ずや。山陽は雜霸の儒、聖学に交渉する無しと雖も、平安一時の名家に非ずや。而して三樹の遺屍、狐狸之を食し、蠅蚋<sub>（おとぎ）</sub>之を嘔<sub>（をむ）</sub>るに委す。僕、独り三樹の爲に忍びざるに非ず、竊<sub>（ひそか）</sub>に山陽の爲に忍びざるなり。然りと雖も、三樹、果して不軌の乱民と爲さんか、其人、字を識り学を講ずること、大塩平八<sub>（へい）</sub>の如しと雖も、僕、固よ

り其屍を収むるを欲せず。果して不軌の乱民に非ざらんか、乞丐（こじき）流氓の屍と雖も、僕、將に急々（至急）力を出し以て之を殛めんとす。況や一介書生に於ておや。況や名家の子に於ておや。此れ僕の惻然、情を動かせし所以のみ。

況や一日三人（橋本・飯泉と）刑に遭う。而して其二は則ち姻族の葬る所と為る。独り三樹、之を収むる者無し。狐狸の噬嚙する所と為る。是れ豈、仁人・君子の聞くに忍ぶ所ならんや。況や前日刑に遭う者は、其の心術未だ的知す可からず。而して其の間、夷狄跋扈、神州陸沈を憤り、以て諱忌を犯せる者、亦必ず之に有らん。僕、聞く、山陽は人として慷慨、言、延元南狩の事に及ぶ毎に、未だ曾て流涕せざるなしと。然らば則ち三樹の刑網に触るるも、亦安んぞ夷狄跋扈、神州陸沈を憤るの過ぎたるに非ざるを知らんや。此又、僕の惻然、情を動かせし所以のみ。

但し僕の山陽に於ける、師弟の契有るに非ず。三樹に於ける、朋友の誼有るに非ず。故に、江木生に其事に任せしめんと欲す。而れども生、柔情逡巡して果さず。僕、此に於てか、資を捐て以て之を処せざるを得ざりしなり。是の故に、僕の此挙を図れるは、名の為に非ず、利を徹むるに非ず。忍びざるの情を達するに過ぎず。則ち未だ始めより賤名を表褫するに非ず。竊に医生某者に、代つて其事に当らしむ。必ずしも嫌忌に触れ、禍患に罹るの理無し。僕、学問迂疏なりと雖も、明哲身を保つの説を聞くこと久し。豈、漫然と禍患を買い、以て江木生の瞞する所と為らんや。足下、幸い念となす勿れ。嗚呼、人の見る所、或いは遽かに之を一路に帰するを得ざる者有り。足下の僕の拳を視て、僕、翻然轍を改むるを肯てせざるは、洵に已むを得ざる所有るのみ。ただ、足下の言、蓋し忠厚の意に出ず。則ち鳴謝せざる可からず。是、僕の以て鄙衷を傾瀉し、緣由を分疏せし所以なり。足下、幸いに諒照せよ。

小春（十月）。大橋順拜。佐佐賢契足下。



すなわち訥庵の言うところは、江木鰐水に頼まれたのでも、唆されたのでもない。尊王論の淵叢・頼山陽の遺子に対し、側隠の情に堪えなかったからである。しかも三樹は不軌の乱民とは異なる、刑網に罹ったのは国難を憂うるの過ぎたためである。それに葬祭の事はひそかに医生某に代わって当らしめたので、危害を蒙る謂われはない、と。

この時、訥庵は回向院に墓碑を建て（吉田松陰の右隣）、碑表には「鴨厓墓」、碑裏には「名醇、字士春、山城人」と刻し、側面に三樹の絶名詩「排雲欲<sup>三</sup>手掃<sup>三</sup>妖焚<sup>一</sup>。……」<sup>(4)</sup>を刻したという（寺尾英量撰「金子得処伝」）。この行為は、当時に於ては頗る勇氣と胆力のいることであって、心ある人々はこれを美談として訥庵を大いに見直した。

たとえば、藤井竹外（諱は啓、字は士開。頼山陽の門人。高槻藩士）が河野鉄兜（諱は維艱、字は夢吉、林田藩士）に与えた書簡<sup>(5)</sup>に、「斬罪の分、死骸は其の主人なる人より下げ願候て、皆々厚禮葬送の處、三樹一人は誰も乞ふ者無<sup>レ</sup>之。然る處、大橋準藏（順藏）、慨然、獨身に而、公邊へ相願、三樹の屍を請取り、立派に葬候趣、福山藩・江木繁太郎（鰐水）の話とて、京師親友中より報じ来り候。實に千古の美談に存候」（安政六年十一月二十五日付）とある。また、羽倉簡堂から山田某へ宛てた書簡<sup>(6)</sup>にも、「福山藩儒官・江木なるもの小塚原に葬候由承居候處、江木より以前、大橋順藏、死骸引取り、葬りもいたし候由。順藏事、是迄さしたる人物とも存不<sup>レ</sup>申候處、感心なる事に御座候」（安政六年十一月七日付）ともいっている。

この回向院の墓碑は、しかし文久二年（一八六二）正月、訥庵が坂下事件に連座<sup>(7)</sup>した時、幕吏の手で取り毀された。訥庵は獄中に在って、坂下事件とは何の関係もない三樹の墓碑についても訊問を受けた。幕府が訥庵の罪案に三樹の建碑一条を加え、しかも墓碑を取り毀させた事を見ても、幕府がいかに建碑を憎悪していたかがわかる。

その後、この年（文久二年）の下半期、大原重徳（権中納言重尹<sup>しげのぶ</sup>の第五子。字は徳義。右衛門督。後年の参議、集議院

長官)が勅使となって、島津久光を補佐に従え、儼然として関東へ下ったさい、戊午(安政六年)以来の国事犯を釈し、死せる者は罪名を削るべしとの議があった。幕府もこれを受容したので、この年十二月、長州藩ではさきに幕府に毀された回向院の吉田松陰の墓碑を復し、さらに翌年(文久三年)正月、高杉晋作が中心となって、松陰の遺骨は若林村(現、松陰神社の地)へ改葬せられた。この時、松陰と共に大獄に死し、回向院でも墳土を接せる頼三樹、小林民部らの遺骨も共に若林村へ移葬せられた。

若林村は、当時は武蔵国荏原郡に属し、高杉らが移葬した地は、土地の人々が大夫山だふやまといった、長州藩の下屋敷の一つであった。それは延宝二年(一六七四)、毛利綱広が在府の時、徳川氏旗下の志村勘右衛門の采地であったのを買い取って、林際に別邸を置いたもので、毛利大膳大夫の持地になったことから、土地の人々は大夫山と称したという。

しかし、元治元年(一八六四)七月、禁門の変があり、幕府が長州征伐の軍を起こしたので、長州藩邸は桜田・麻布などが没収され、他は火をかけられたりし、若林村の松陰、三樹、民部らの墳墓も破毀された。

やがて時代は回って、明治元年十一月、長州藩では墳墓破毀のことを徳川氏に詰り、木戸孝允は藩命を受けて松陰らの墳墓を復した。この時、中谷正亮など、元治元年の役に難に殉じた四十五名の招魂碑を併せ建て、その墓域の華表には、「王政一新之歳」「木戸大江孝允」の文字を、両脚にそれぞれ刻した。

その後、明治十五年十一月に至り、旧藩主・毛利元徳、並びに門人・知己があい謀って、その墓畔に松陰神社を建てた。けだし松陰・三樹らが殉難の日から、二十四年の後である。これが松陰神社の縁起で、それは現在の東急玉川線、松陰神社前駅から東へ約一キロ、現在の地番で世田谷区若林四ノ三五、墓域は正面中央に松陰、その右隣に小林良典(民部少輔、鷹司諸太夫)・三樹の墓が並んでいる。なお、三樹の碑表には「頼三樹三郎某姓醇墓」、碑裏には「安政六己未十月廿七

日没行年三十四」<sup>(8)</sup>と刻されている。

けだし現在の松陰神社の故地へ、かつて長州藩の有志が松陰・三樹らを移葬したのは、小塚原は刑死者を抛る穢汚の地で、鬼哭啾々たる所<sup>(9)</sup>である。英骨を安んずる所以ではないというのが、理由の一斑であつたろう。しかし、回向院の三樹の墳墓は、何といつても大橋訥庵が、幕禮をも顧みず、敢然として建立した初葬の地である。訥庵は坂下事件で捕縛され、間もなく病死したが、その養子の正燾<sup>まさてゐる</sup>（諱は燾<sup>てゐる</sup>、通称は燾次<sup>さいじ</sup>）は亡父の遺意を尊重して、関口良輔<sup>こうすけ</sup>（訥庵の門人。号は黙斎、通称は権助。幕臣。後年の山口県令、静岡県知事。明治二十二年五月病没、享年五十四）、松岡萬（幕臣）らと謀つて、元治元年（一八六四）十月、同地に墓碑を再建した。これが現在も南千住の回向院にある墓碑で、その碑表には旧のごとく「鴨厓墓」と刻され、側面にも再び三樹の絶命詩が刻されている。

この回向院の墓碑が再建される時、松岡萬が所蔵していた三樹の分骨が埋葬された。松岡の手に何故に三樹の分骨があつたのか、石津灌園が撰した「頼処士伝略」<sup>(10)</sup>によれば、「松岡萬なる者は幕人なり、而れども深く処士の死節を欽慕し、移葬之挙を聞くに及び、切に藩吏に請うて、其の遺骨兩三枝を分受し、齋<sup>い</sup>ち歸りて之を祭る」（もと漢文）といっている。すなわち、松岡萬は三樹を欽慕するあまり、若林村へ移葬の事を聞き及ぶや、現場へ馳せつけ、強いて分骨を請うて持ち帰り、自宅で密かに供養していたのである。ところが回向院の墓碑が再建されるにつき、大橋正燾らの勧めにまかせて、慎んでここに埋葬したわけである。

この埋葬に当たっては、松岡萬は「頼三樹遺骨墓誌」<sup>(11)</sup>と題する一文を撰し、以て墓前に奠したという。

夷狄之衆、頤於我神州也、頻年屢來、強乞互市。士民繹、於是慷慨壯烈之士、殉國難者、無慮數十人矣。而

如三賴三樹、蓋其一也。癸亥正月、長門宰相、改葬其遺骸於若林邸。予、乃往獲其遺骨一片、晨夕祭之、以慕其遺烈。今茲十月、同志將建其遺墳于小塚原、來謀于予。予、乃埋其遺骨、以傳不朽。嗚呼、三樹雖死、若其精忠勁節、則與天壤不二泯滅矣。

元治紀元甲子十月。幕府小臣・松岡萬識

〔訓み〕

夷狄の我が神州を蹂躪するや、頻年屢々来り、強いて互市を乞う。士民繹騷、是に於て慷慨壯烈の士、国難に殉ずる者、無慮數十人。而して賴三樹の如きは、蓋し其の一なり。癸亥（文久三年）正月、長門宰相（毛利敬親）、其の遺骸を若林村に改葬せらる。予、乃ち往いて其の遺骨一片を獲て、晨夕之を祭り、以て其の遺烈を慕う。今茲十月、同志、將に其の遺墳を小塚原に建てんとし、来つて予に謀る。予、乃ち其の遺骨を埋め、以て不朽に伝う。嗚呼、三樹は死すと雖も、其の精忠・勁節の若きは、則ち天壤と与に泯滅せず。

元治紀元甲子十月 幕府小臣 松岡萬識

ところで、三樹が処刑された時、三樹の腹違いの長兄・聿庵（諱は元協、字は承緒、通称は余一。広島藩儒）は、すでに世を去っていた（安政三年八月病没、享年五十六）。しかし、同腹の次兄・支峰（諱は復、字は士剛、通称は復二郎・又二郎。三樹より二歳の年長）は、京都において経学の帷を垂れていた。もとより三樹の身を深く按じていたが、表向き葬祭するのは遠慮があった。しかし時代は回って、文久二年（一八六二）十二月に至り、その筋より次の沙汰を受けた。

頼 又次郎

其方弟・頼三樹三郎儀、先年死罪申付候處、此度京都表ヨリ、格別の思召有<sup>レ</sup>之候ニ付、死罪御免、勝手ニ石塔立候様被<sup>ニ</sup>申渡<sup>一</sup>。

これを得た支峰は、東山の長樂寺（現、京都市東山区鳥居前東入る円山町）<sup>四</sup>なる頼家の墳塋に、三樹の墓碑を建立した。長樂寺は、かつて頼山陽が遺言<sup>四</sup>して、その墓所とした所で、本堂の後山、將軍塚への登口の左手に頼家の墳塋が設けられている。そこは京都市街を見下す絶佳の所で、頼山陽が予めここを手当したもの、この風光を愛したが故であろう。文久三年六月、支峰は三樹のために、次の碑銘を草し、これを碑裏に刻した。

### 頼三樹之墓

余曾欲<sup>レ</sup>撰<sup>ニ</sup>亡弟之碑文<sup>一</sup>。牧信吾曰、令弟之事、存<sup>ニ</sup>于天下之口碑<sup>一</sup>。且多<sup>ニ</sup>觸犯<sup>一</sup>。不<sup>ニ</sup>必誌<sup>ニ</sup>焉<sup>一</sup>。余是<sup>レ</sup>之。既而再思、歷<sup>ニ</sup>年之久、或没<sup>ニ</sup>其生終事実<sup>一</sup>、乃敘<sup>ニ</sup>其略<sup>一</sup>。弟諱醇、字子春、通稱三樹三郎、自號<sup>ニ</sup>古狂生<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>文政乙酉<sup>一</sup>生、戊午歲坐<sup>ニ</sup>事東下、遂刑死。實安政六年十月七日也。年三十五。江都人大橋順藏、収<sup>レ</sup>尸葬<sup>レ</sup>之、立<sup>レ</sup>石表<sup>レ</sup>之。後有<sup>レ</sup>旨踏<sup>レ</sup>之。至<sup>ニ</sup>壬戌之冬<sup>一</sup>、特原<sup>ニ</sup>墓祭<sup>一</sup>。乃立<sup>ニ</sup>此石<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>招魂之處<sup>一</sup>。信吾曰、可。令弟亦可<sup>ニ</sup>以隕<sup>ニ</sup>矣<sup>一</sup>。頼復識。

### 〔訓み〕

余、曾て亡弟の碑文を撰せんと欲す。牧信吾（号は百峰）曰く、令弟の事、天下の口碑に存せり。且つ觸犯多からん。必ずしも誌さざれと。余、之を是<sup>ぜ</sup>なりとす。既にして再思するに、年を歴るの久しき、或は其の生終の事実を没せんと、乃ち其の略を敘す。弟、諱は醇、字は子春、通稱は三樹三郎、自から古狂生と号す。文政乙酉<sup>いっす</sup>（八年）を以て生まれ、戊午<sup>ぼご</sup>の歲（安政五年）、事に坐して東下し、遂に刑死す。実に安政六年十月七日なり。年三十五。江都の

人・大橋順藏（号は訥庵）、尸を収めて之を葬り、石を立てて之を表す。後、旨ありて之を踏たふす。壬戌（文久二年）の冬に至り、特に墓祭を原ゆるさる。乃ち此の石を立てて招魂の処と為す。信吾曰く、可なり。令弟以て瞑すべきなりと。頼復、識るす。

以上によって、三樹の墓碑が小塚原の回向院にあること、また移葬せられて世田谷の松陰神社にもあること、さらに又、京都は東山の長樂寺にもあることは、それ相당한理由のあることがわかる。

しかし、これとは別に、丹波は亀岡の金輪寺（現、京都府亀岡市宮前町官川上王山）にもあるというのは何故であろうか。金輪寺は亀岡市の西郊約三里、上王山の奥深いところで、その参道は今日でもデンプでなければ上れないほど峻嶒である。いわんや当時において、このような山間の僻地に墓碑が建てられたについては、よほどの理由がなければならぬ。そこには、当時の住職・大橋黙仙と、頼三樹との並々ならぬ関係があったわけで、これについては項を改めて探って見たい。

# 〔補注〕

## (1) 小塚原回向院

回向院（東京都墨田区東両国二、国豊山無縁寺。

本派浄土宗）の別寮で、常行庵ともいう。仕置にな

った罪人を葬るため、刑場の側に建てられた小寺院。

## (2) 森退藏の実記

なお、小塚原は旧奥州街道に沿い、古地図に「志をきば」、或いは「浅草はりつけ場」と記され、一に骨ヶ原ともいう。幕府開府の頃より、刑場に宛てられた所。

寺田剛著『大橋訥菴先生伝』一四二頁

- (3) 大橋訥庵が佐々吉甫に答えた書状（安政六年十月某日付）

「復『佐佐吉甫書』（『下野烈士伝』）。（『大橋訥菴先生全集』中巻、文集巻三、五九一六〇頁所収）

- (4) 頼三樹の絶命詩

後出（四、金輪寺の墓碑。補注<sup>(1)</sup>）

その拓本（頼支峰書）は、頼山陽旧跡保存会所蔵。

- (5) 藤井竹外が河野鉄兜に与えた書簡（安政六年十一月二十五日付）

拙著『頼三樹三郎』二〇〇頁

木崎好尚著『頼三樹伝』三四三―三四四頁

- (6) 羽倉簡堂が山田某へ宛てた書簡（安政六年十一月七日付）

『頼山陽全書』全伝下巻、七七二頁

- (7) 大橋訥庵と坂下事件

坂下事件は、老中・安藤対島守（諱は信正）の公

武合体政策を、因循姑息なりとした水戸・宇都宮な

どの有志が、文久二年正月十五日、坂下門外で彼を要撃したもの。大橋訥庵は、その策源地であったが、実行に先立つ三日前、幕吏に密告する者があって、その養子・<sup>てゐる</sup>熾次と共に捕えられ獄に下された。

- (8) 行年三十四

松陰神社の墓碑には三十四とあるも、三樹は文政八年（一八二五）五月二十六日（陽暦七月十一日）の生まれであるから、安政六年（一八五九）十月は数え年で三十五が正しい。

- (9) 鬼哭啾々たる所

大橋訥庵が小塚原刑場を詠じた詩に、「刑死累々、鬼火青し。……」とある（「殉難前草」。寺田剛著『大橋訥庵先生伝』一四二頁所収）。現在でも南千住のあたりを、道路工事などで掘り起こすと、往々にして人骨が見られるという。

- (10) 石津灌園撰「頼処士伝略」

石津灌園著『灌園遺稿』卷三、六一九丁。なお灌

牧山休山編「長樂寺誌略」

園は、諱は発、字は子節。明治二十四年八月病没、

『京都市の地名』（日本歴史地名大系）三三六―

享年四十九。

三二七頁

(11) 松岡萬撰「頼三樹遺骨墓誌」

『頼山陽全書』全伝下巻、七七三―七七四頁。松

岡萬の人物については、蒲生綱亭撰「松岡萬伝」（木

崎好尚著）『頼三樹伝』竹収）。

天保三年九月二十六日付で、牧百峰、宮原節庵、  
兒玉旗山の連名にて、聿庵に報じた書簡（『頼山陽  
全書』全伝下巻、口絵説明）

(12) 東山の長樂寺

## 二、大橋黙仙の人となり

頼三樹の在世当時、金輪寺きんりんの住職は大橋黙仙もくせんといつて、方外に交遊関係が多く、ことにいわゆる勤王志士とは、かなり深い交際があったらしい。

黙仙は文化十年（一八一三）、美濃国養老郡とくろ時村大字下山しやま（現、岐阜県養老郡上石津村下山）に生まれた。父は同地の唯願寺（真宗）の住職・大橋明教で、黙仙はその四男であった。幼名は亮雄といったが、出家して亮裕と称し、さらに黙仙・龍禅・僊逸・喝蟾かつせなどと号した。また、現寿院といったこともある。因みに、その親交のあった梁川星巖には二十四歳の年少、頼三樹には十二歳の年長である。



彼は幼時、京都に出遊し、天台宗の僧徒となり、さらに江戸に遊んで儒学を修めた。二十一歳の頃、一旦は郷里に帰ったが、幾くもなく再び上遊し、比叡山に上って、天台の学を究め、また南都にも遊び、さらに筑紫を遊歴し、かくて博く内典・外典に通じたという。

弘化三年（一八四六）、三十四歳の時、丹波国南桑田郡宮前村（現、京都府亀岡市宮前町宮川）の金輪寺に住職となった。金輪寺は、役の行者ゆかりの修験所で、延暦年間（七八二—八〇六）、西願上人によって創建され、明恵上人が中興し、後深草天皇の勅額を有する古刹である。江戸時代には、亀山藩主の祈願所になっている。そこは宮川村落より登ること七町、神尾山の山頂に近く、俗界から離れた深山であるが、今日でも極楽坊、宝蔵坊、竹中坊など、塔中寺院の跡をとどめ、伽藍数棟を有するかなりの規模である。

默仙は、幕末から明治初年にかけて、ここを本拠地として、出でては広く京畿の名士と交わった。「金輪寺文書」で見ると、梁川星巖、頼三樹、池内大学、梅田雲浜、松本奎堂、山中静逸、坂本龍馬、中岡慎太郎、木戸孝允、淡海魁堂などと最も親しく、彼らの志業を陰に陽に支援し、何かと便宜を図ったらしい。

默仙は詩作を好み、梁川星巖の教えを受け、その詩社にも加入し、星巖を盟主と仰ぐ三樹、池内大学などと親しく往來した。梁川星巖の詩集を繙けば、彼と星巖との吟行が出ている。たとえば、彼が四十歳、星巖が六十四歳の嘉永五年（一八五二）四月、彼は星巖を誘って、嵐山から保津川へ舟遊した。時に星巖に、次のような詩賦がある。

喝蟾上人、要余遡嵐峽、抵宝珠津。舟中記曝目。五絶句。(2)

（喝蟾上人、余を要して嵐峽を遡り、宝珠津に抵る。舟中、曝目を記す。五絶句）

一

倩<sup>せう</sup>得<sup>とく</sup>篙<sup>こう</sup>工<sup>こう</sup>二<sup>に</sup>遡<sup>さう</sup>峽<sup>けつ</sup>川<sup>せん</sup>一<sup>一</sup>  
 人生何適不<sup>ふ</sup>隨<sup>ずい</sup>緣<sup>えん</sup>一<sup>一</sup>  
 也知大道本無<sup>な</sup>二<sup>二</sup>  
 逢掖伽黎同一船

篙<sup>こう</sup>工<sup>こう</sup>を倩<sup>せう</sup>い得<sup>とく</sup>て 峽<sup>けつ</sup>川<sup>せん</sup>を遡<sup>さう</sup>る  
 人生 何<sup>なん</sup>くに適<sup>ゆ</sup>いてか 隨<sup>ずい</sup>緣<sup>えん</sup>ならざらんや  
 また知る 大道は もと二なきを  
 逢<sup>ほう</sup>掖<sup>えき</sup> 伽<sup>かり</sup>黎 同一の船

二

薰風吹送上<sup>上</sup>灘<sup>灘</sup>船<sup>船</sup>  
 雷吼聲中百丈牽  
 好是殘櫻花已盡  
 青山緣樹子規天

薰風 吹き送る 灘<sup>だん</sup>を上<sup>の</sup>るの船  
 雷<sup>らい</sup>吼<sup>こう</sup>声<sup>こ</sup>中に 百丈を牽く  
 好し是れ 殘桜 花すでに尽く  
 青山 綠樹 子規の天

三

瀧水穿<sup>レ</sup>雲曲折通  
 巖花開遍映山紅  
 舟行著色屏風裏  
 人在<sup>二</sup>回文錦字中<sup>一</sup>

瀧<sup>たう</sup>水<sup>すい</sup> 雲を穿<sup>う</sup>ちて 曲折して通<sup>と</sup>ず  
 巖花 開き遍ねし 映<sup>えい</sup>山<sup>さん</sup>紅<sup>こう</sup>  
 舟は行く 著色 屏風の裏を  
 人は 回<sup>かい</sup>文<sup>ぶん</sup>錦<sup>きん</sup>字<sup>じ</sup>の中に在り

四

冷 冷 不<sub>レ</sub>盡 更 冷 冷  
不<sub>二</sub>管 山 靈 溪 亦 靈  
此 是 鈞 天 小 廣 樂  
風 裳 水 佩 夢 中 聽

冷々<sup>れいれい</sup> 尽きず 更に冷々  
ただに山の靈のみならず 溪も亦た靈なり  
此は是れ 鈞天<sup>きんてん</sup><sup>(4)</sup>の小広楽  
風裳 水佩<sup>すいはい</sup> 夢中に聴く

五

回 風 飛 雪 泉 掀 舞  
臥 虎 跳 龍 石 倒 奔  
過<sub>二</sub>盡 艱 危 始 安 穩  
人 烟 一 簇 寶 珠 村

回風 飛雪のごとく 泉は掀<sup>えん</sup>舞し  
臥虎 跳竜 石倒<sup>はし</sup>に奔る  
艱危を過ぎ尽して 始めて安穩  
人烟 一簇<sup>いちさく</sup> 宝珠村<sup>ほしず</sup><sup>(5)</sup>

大意は、第一首は、船頭をやとって、嵐峽の川を遡った。人生は詮ずる所、水が風の縁に随って波を起こすようなもので、もろもろの因縁にしたがい応ぜざるを得ない。また、その大道は本来無二のものであるから、こうして儒者と僧家とが、同一の舟に身をまかせるのも、別に不思議なことではない。

第二首は、おりから薰風が、はやせを上る舟を吹き送ってくれる。奔流が岩にあたって雷の吼ゆるごとき中を、舟子は岸にあって百丈を牽いて行く。今や、桜花は散り尽きたが、青山の緑樹に子規が啼くという好季節である。

第三首は、急流はあたかも雲を穿つような勢いで、曲折して走っている。兩岸の巖の上には、山つつじが真つ盛りである。この奔流を行く舟は、あたかも彩色した屏風のなかを突き進むようだ。また、舟の人は、回文詩、錦字詩の中にいるようで、懷惋を極めた奔流の中を旋回しているようだ。

第四首は、清く涼しげな水の音が、行けども行けども尽くることなく、山ばかりか溪もまた靈妙である。さながら風裳や水佩の神が、上帝の宮殿で吹奏する音楽を、夢うつつに聴いているような感にうたれる。

第五首は、峡谷の中は風が舞い、瀑泉は飛雪のごとく高く揚がる。虎が臥し、竜が跳るような岩が、水に遡って奔るかと思われる。奔流を走り過ぎ、危険な地帯を脱出すると、ほっと安堵の胸をなでおろした。一むらの人煙が見えてきたがあれが宝珠村なのだ、と。

この一連の詩によると、一行は保津川を遡り、また下ったようで、舟遊をたんのうしたわけである。

この年（嘉永五年）九月二十三日にも、黙仙は星巖、紅蘭の夫妻と共に、京を発して湖東に遊んだ。すなわち大津より舟をやとって、琵琶湖上を舟遊し、星巖は五絶句を賦している。

九月念三日、發<sub>レ</sub>京赴<sub>二</sub>湖東<sub>一</sub>。喝蟾上人及内子従焉。舟中紀<sub>レ</sub>事。五首。<sup>(6)</sup>

（九月念三日、京を発して湖東に赴く。喝蟾上人、及び内子従う。舟中、事を紀す。五首）

一

一雙酒鼈壓<sub>二</sub>擔頭<sub>一</sub>

一雙の酒鼈<sup>しゅべつ</sup>の 担頭<sup>たんとう</sup>を圧す

行路無<sub>レ</sub>勞解<sub>二</sub>客愁<sub>一</sub>

行路 勞するなく 客愁を解くに

見<sub>レ</sub>説湖東霜信早  
尊前風味内黄侯

説くならく 湖東 霜信早しと  
尊前の風味は 内黄侯ならん

二

風光漸近小春天  
殘菊早楓秋闌妍  
又是晏公要<sub>三</sub>瘦杜<sub>一</sub>  
袈裟同上泛湖船

風光 漸く近し 小春の天  
殘菊<sub>ざんぎく</sub> 早楓<sub>さうふう</sub> 秋 妍<sub>けん</sub>を闌わす  
また是れ 晏公<sub>びんこう</sub> 瘦杜<sub>さうと</sub>を要し  
袈裟 同じく上る 泛湖<sub>はんこ</sub>の船

三

霜晴水氣半成<sub>レ</sub>煙  
紅蓼花開滿<sub>三</sub>渚田<sub>一</sub>  
容<sub>二</sub>得漁童眠正熟<sub>一</sub>  
小舟流過白鷗前

霜は晴れ 水氣 半ば煙と成る  
紅蓼<sub>こうりょう</sub>の花開いて 渚田<sub>しよでん</sub>に満つ  
漁童<sub>ぎょどう</sub>の眠 正に熟するを容れ得て  
小舟 流れ過ぐ 白鷗の前

四

疎柳一旗江上酒

疎柳 一旗 江上の酒

亂山孤棹道中詩

亂山 孤棹 道中の詩

常時人誦青邱句

常時 人は誦す 青邱の句

今日青邱句裏來

今日 青邱句裏に來たる

# 五

半湖秋水漾殘暉

半湖の秋水 残暉を漾わす

兩兩漁娃盪槳歸

兩々の漁娃 槳を盪かして歸る

行入蘆叢舟不見

行いて 蘆叢に入りて 舟見えず

喫驚一鷺帶魚飛

喫驚す 一鷺の 魚を帯びて飛ぶに

大意は、第一首は、一つがいの甕型の酒器が、棚の上にとっしり置いてある。これさえあれば、旅先きの淋しさを晴らすことができる。聞くとところによれば、湖東は霜の下りるのが早いという。さればこそ、酒のさかなに蟹の味がことにおいしかろう。

第二首は、風光はようやく小春（十月）に近く、残菊・早楓は、争って秋の美しさに色をそえている。この時、かつて杜甫の友僧の旻公が、うらぶれた杜甫を迎えて舟遊に誘ったごとく、わが友僧の喝蟾師が、この瘦せたる自分を待ち受けて、湖に舟を泛べてくれた。

第三首は、霜が消えかかって、水蒸気は半ば煙となって立ち上ぼった。湖岸ぞいの渚に接する田圃には、紅い夢の花が

咲き満ちている。わが乗れる舟の中では、漁師の子供がぐっすり眠りこんでいる。小舟は、なにげなく白鷗の前を流れ過ぎた。

第四首は、疎らな柳のあたりに、一本の旗が見えている。あれは、湖岸の酒店であろう。不揃に峙え立つ山々を望みつつ、孤舟を棹して詩を作りながら行く。それは明の高啓（字は季迪、号は青邱）が得意の詩境で、誰でもが知っている。われらも今日は、高啓の詩境にあやかるべく、ここにやって来た。

第五首は、残照が半湖の秋水に、ゆらゆらと映えている。漁師の若い娘が、棹を動かして帰って行く。それが芦の繁みの中に入って、ついに見えなくなったと思ったら、びっくりした一羽の鷺が、そこから魚を喰わえて飛び出した、と。

この舟遊から五年後、安政四年（一八五七）冬にも、默仙は星巖の京寓を訪ね、一夜、歓談したことが、星巖の次のような七絶でわかる。

留<sub>ニ</sub>喝<sub>レ</sub>蟾<sub>上</sub>人<sub>ニ</sub>夜話<sub>(8)</sub>

（喝蟾上人を留む。夜話）

心事欲<sub>レ</sub>談無<sub>ニ</sub>好朋<sub>一</sub>

心事 談ぜんと欲するも 好朋なし

且留<sub>ニ</sub>蟾<sub>老</sub>剪<sub>ニ</sub>寒燈<sub>一</sub>

且らく蟾<sub>さんろう</sub>老を留めて 寒灯を剪る

兩家風度略相似

兩家 風度<sub>ふうど</sub> ほぼ相い似たり

邈<sub>ニ</sub>還<sub>仙</sub>人<sub>羈</sub>苴<sub>僧</sub>

邈<sub>りようとう</sub>還の仙人 羈<sub>らそ</sub>苴の僧

大意は、語り合いたい良友には、なかなか恵まれない。そこへ喝蟾師が来訪されたので、これ幸いと引き留めて、灯火をともして夜おそくまで話をした。君は僧家、僕は儒者で、住む世界は違うけれど、風采や趣向はよく似合っている。一は飄々たる仙人のごとく、一は流れに身をまかせる浮草のごとき僧である、と。

なお、金輪寺にも、星巖と紅蘭とが黙仙に宛てた書状が、一通ずつ残っている。まず星巖の書状<sup>例</sup>を見ると、次の通りである。

寒候、御勝常奉<sup>レ</sup>賀候。深海氏より囑<sup>しよ</sup>の卷物二品、彫物等、値段の處、皆々大相違に御座候。小生は和物は一向に存じ不<sup>レ</sup>申候。聖教序も書家にては不足。好事家にては目<sup>も</sup>不<sup>レ</sup>及、致方無<sup>レ</sup>之候。元・明の品か、又日本にても中古以上ナレバ佐理卿、小野道風等、又々致方御座候得共、乍<sup>ニ</sup>氣之毒<sup>ニ</sup>聖教序、幻住庵記は御使へ返却致候。彫物は大物に付、來春迄小生の方へ預り置候。賀<sup>か</sup>來より一昨日書狀参り、山中・矢野、潤筆二家にて金三兩遣し呉れ候。且山陽卷一件にて、兩三日内に上京致し候様に申越候。上人御出無<sup>レ</sup>之候ハ不都合存候。小生彼方一向に存じ不<sup>レ</sup>申候。宜敷奉<sup>レ</sup>希候。草々

臘月廿二日

星巖

龍禪上人

狛座下

内容は、黙仙が深海氏（号は鑒水。丹波龜山の勤王家）から、「聖教序」（唐・太宗撰）、「幻住庵記」（松尾芭蕉著）



などの売却を依頼されたので、これを更に星巖に托した。星巖は心当たりを当たってみたが、どうも換金できそうもないので、とりあえず現物を返却したというわけである。なお後段、賀来とあるのは、賀来寿平のこと、星巖は彼にも「聖教序」や頼山陽の詩画卷の売却を托していることが、正月六日付（嘉永年間）の別便にて見える。

また、次に示すのは梁川紅蘭が黙仙に宛てた書状である。

好便に任せ一書呈御左右様一度候。不<sub>三</sub>相變<sub>二</sub>御清適奉<sub>レ</sub>賀候。今年は夏秋交御上京可<sub>レ</sub>有之由追々風之所、日々むなく相待候。此僧、外君、在世中知己ニテ、易世後も實に深情に致呉れ、十年如<sub>二</sub>一日<sub>一</sub>私も大に悦候。弊家ニも老衰に至候へ共、先々無事に消光致候。御安意可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候。今年は外君祠堂も出来安心仕候。社中よりも大に世話に相成候事、何卒一度御上京被<sub>レ</sub>下、祠堂を御目に懸度想像いたし候。拾遺稿料御取集被<sub>レ</sub>下候所、好便無<sub>レ</sub>之御心配の由、此人へ御渡被<sub>レ</sub>下候は、大に<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>有存候。拙筆半折呈候。何卒女史へよろしく御傳、此畫御投與可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。女子御携御上京まち居候。日々寒氣まさり候、折角御自重奉<sub>レ</sub>祈候。

九月六日

紅蘭

この書状は、「此僧」とある使に持たせて、名宛人は態と書いてない。差出年次は不明なるも、星巖の没後であることは、星巖の詞堂のことが出ているし、遺稿（八卷）のことが出ているのでわかる。内容は、星巖の遺稿が板刻され、その売捌きを黙仙が手伝ったので、稿料を「此僧」なる使に渡して欲しいというもの。黙仙が星巖一家の生活とも、深く関わっていたことを推測せしめる。なお、星巖遺稿の板刻は、文久三年（一八六三）正月のことであるから、この紅蘭の書状

は同年九月ということになろうか。

さて、安政五年（一八五八）秋から冬にかけて、大獄の嵐が吹き荒んだが、頼三樹は補縛される数日前、<sup>119</sup>黙仙に宛てて松本奎堂（諱は衡、字は士権、通称は謙三郎）を紹介している。奎堂は、もと三州刈谷藩士、後年の天誅組の領袖で、識見高邁、豪毅卓抜の俊英である。奎堂は三樹の紹介状を携えて金輪寺を訪ね、黙仙と親交を結んだが、そのおり次のような詩賦がある。

遊<sup>三</sup>神尾山ニ賦呈<sup>三</sup>喝蟾上人獅座下<sup>一120</sup>

（神尾山に遊び、賦して喝蟾上人獅座下に呈す）

松 本 衡 拜 草

|                            |                                                        |
|----------------------------|--------------------------------------------------------|
| 少 壯 嘗 稱 風 月 狂              | 少 壯 嘗 て 称 す 風 月 狂                                      |
| 錫 <sup>レ</sup> 飛 杯 渡 太 勿 忙 | 錫 を 飛 ば す 杯 渡 <sup>はと</sup> 太 だ 勿 忙 <sup>はなまじ</sup>    |
| 如 今 一 洗 舊 痼 去              | 如 今 一 洗 旧 痼 去 る                                        |
| 來 住 丹 山 紫 翠 房              | 來 っ て 住 す 丹 山 の 紫 雲 房                                  |
| 滿 檯 醍 醐 滿 架 書              | 滿 <sup>まん</sup> 檯 <sup>だい</sup> の 醍 醐 滿 架 の 書          |
| 淹 留 何 厭 食 無 魚              | 淹 <sup>えん</sup> 留 <sup>りゅう</sup> 何 ぞ 厭 わ ん 食 に 魚 な き を |
| 坦 懷 飲 <sup>レ</sup> 子 能 容 物 | 坦 <sup>たん</sup> 懷 <sup>かい</sup> 子 を 飲 っ て 能 く 物 を 容 る  |
| 客 到 半 千 猶 有 <sup>レ</sup> 餘 | 客 到 る 半 千 な お 余 り 有 り                                  |

大意は、少壮の頃は、自然に交わり、風にうそぶき、月を眺めて楽しみたいと、各地をさんざん遊歴して、あたかも晉の奇僧・杯渡はいとのようであった。今はこの宿癖を一擲して、丹波の金輪寺なる紫雲房に身体を休めている。卓上には美味なる山菜が盛られ、書架には万巻の書籍がある。したがって、食膳に魚など無くても、飽きることがない。主僧は胸にわだかまりがなく、よく客を欣んで寛裕である。客がいくら訪ねて来ても、受け容れるのにやぶさかでない、と。

次に、かつて頼山陽に詩文を学び、絶句の名手として著名であった藤井竹外（高槻藩の名族。（前出））にも、金輪寺を訪ねて黙仙と春夜を共にした次のような七絶二首がある。

### 偶書<sup>四</sup>

#### 一

飛錫偶然過草堂<sup>一</sup>

錫を飛ばせて 偶然 草堂を過ぐ

樽前剪燭話何長

樽前 燭を剪きって 話すこと何ぞ長き

機鋒相對眞如劍

機鋒 あい対す 眞に劍の如し

戒律不持般若湯

戒律 持せず 般若湯

#### 二

遠寺殘鐘聲隱隱

遠寺の殘鐘 声 隠々たり

西窓落日影茫茫

西窓 落日 影は茫々

心閑市井還<sup>ニ</sup>塵外<sup>一</sup>

心閑かに 市井より 塵外に還る

底處梅花暗送<sup>レ</sup>香

底る処 梅花 暗に香を送る

春夜與<sup>ニ</sup>喝蟾上人<sup>ト</sup>同賦<sup>ス</sup>

大意は、第一首は、遊歴して遇ま金輪寺を訪ねた。美酒を傍らにし、燈を挑げて、話ははずんだ。事理の応酬は、鋭利な刃物にも似て、真に有益なやり取りである。禅家の戒律もさることながら、うま酒を汲めばいよいよ興趣は尽きない。

第二首は、どこか遠くの寺で衝き鳴らす鐘の音が、かすかに余韻を伝えている。西窓の彼方には、落つる夕日が、広く遙かな影を落している。私は心を静かに保ち、塵埃にまみれて市街地より、この仙境へ還って来た。ここは梅がまっ盛りなことは、暗夜も芳ばしい香を放っているのでわかる、と。

黙仙の京畿諸士との交流は、当初は梁川星巖を中心に、その抱擁圈で行なわれたらしいが、安政大獄でこの関係が崩れてからは、岩倉具視とその関係者との間に、かなり親昵な関係ができたらしい。まず、金輪寺には、岩倉の側近であった山中静逸（諱は猷、字は信夫。後年の石巻県権知事、閑院宮家令）が、黙仙に宛てた書簡があるほか、岩倉の公子・具定を、しばらく金輪寺で預っていたことがある。

また、岩倉の麾下で、その胆力を称せられた桜井頼直（号は義山、通称は新三郎。美作の人。後年の東山道鎮撫総督旗奉行）が、明治元年四月、東京で暗殺された時（享年四十五）、黙仙はこれを悼んで、金輪寺に遺骨を納め、頼三樹の墓碑に並べて、「桜井新三郎源頼直墓」の墓碑を建てている。以て岩倉との関係も推測される。

さらに黙仙と交流のあった名流には、森田節斎（諱は益、字は謙蔵。大和五条の出身。頼山陽に文を学び、猪飼敬所・

近藤篤山に経書を学ぶ。明治元年七月病没、享年五十八）があつた。すなわち金輪寺には、節齋が黙仙に宛てた書簡<sup>四</sup>がある。年月日を欠くも、節齋は幕末期は紀州・南海に隠れていたもので、それ以前のものであろう。

拜讀仕候。過日は御光來、何の風情も無<sup>レ</sup>之失敬仕候。然者昨日、關口殿參堂のよし、東都之説御洩し被<sup>レ</sup>下難<sup>レ</sup>有存候。京師も今朝ニ至何の沙汰も無<sup>レ</sup>之候。尊師は何日頃より御上京候哉、一兩日の中御上京奉<sup>ニ</sup>希上<sup>ニ</sup>候。且又過日御面倒御願申候銀子返済の由承知仕候。さきの銀子は又宜敷急に返済相成様、御計奉<sup>ニ</sup>願上<sup>ニ</sup>候。先は右取いそぎ貴酬迄。早々頓首

黙仙老尊師

節翁

一、殘産<sup>一</sup>シメデ澤山御めぐみ難<sup>レ</sup>有奉<sup>レ</sup>謝候

これによれば、黙仙は節齋から融資の斡旋にも与っていたらしい。幕末期、金輪寺の財政はかなり逼迫していたようで、黙仙の没後、後住の小谷泰延が、明治七年六月付で、村戸長（桑田郡第八区宮川村）・副区長・区长と連署をもって、本山であつた聖護院門跡に対し、借財返済のため山林・田地等の払下げを申請している。この文中、「右、黙仙、多年勤王ノ素意有<sup>レ</sup>之、有志ヲ養育シ浪士ヲ匿置、且亦東西奔走、其他入費不<sup>レ</sup>少、凡八百五十拾円借財相嵩、僻地ノ小院、手段絶ヘ困窮ノ場合に立至り、不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>止田畑等売払、大抵仕法立仕候ヘドモ、今日三百円殘借有<sup>レ</sup>之、甚難澁當惑仕候間、何卒、黙仙之微衷御憐察被<sup>ニ</sup>成下<sup>ニ</sup>、今般御検査有<sup>レ</sup>之候境外山林並ニ田地等、別紙代價之通御仁恤ヲ以、御拂下被<sup>ニ</sup>成下<sup>ニ</sup>候様、奉<sup>ニ</sup>敷願<sup>ニ</sup>候<sup>一</sup>」<sup>四</sup>とある。されば黙仙の在世當時から、金繰りにはかなり苦労していたものと思われる。

さらに又、次の書簡は、中岡慎太郎（諱は道正、号は迂山。土佐出身。慶応三年十一月、京都河原町の旅寓で、坂本龍馬と共に暗殺された。享年三十）が、黙仙に宛てたものである。<sup>44</sup>文中、「品」とあるのは品川弥二郎（長州藩士。後年の内務大臣）、「田中」とあるのは田中光顕（土佐藩士。後年の宮内大臣）のことであろう。

過日は久々振に拜<sup>ニ</sup>貴面<sup>一</sup>、御情實相伺大慶此事御座候。御頼のもの伊藤春畝壹枚、品壹枚、田中二枚、迂生二枚相集り、愚筆をふるい申候。右落掌相成候はゞ望外の至也。頓首々々

四月廿五日

因循迂山<sup>いんじゆん</sup>

遷逸老足下

また、次に示すのは、談海槐堂<sup>おちみかいどう</sup>（諱は緝、字は敬夫、号は頑仙。近江坂田郡の出身。明治十二年六月病没、享年五十八）が、黙仙に呈した書簡<sup>45</sup>で、明治初年から二年頃のものであろう。槐堂は、江馬天江の兄で、変名を板倉氏とも勝木氏ともいう。農家の出であるが、早くより伏見に出て薬種商を営み、さらに醍醐家に奉仕して従六位に叙せられ筑後守を称した。安政年間、梁川星巖の抱擁圈に入って、頼三樹、梅田雲浜らと交わった。文久年間、洛東に文武館を設くるや、武市瑞山、坂本龍馬、広沢兵助、品川弥二郎が来たり会した。元治元年七月、蛤門ノ変に幕軍に捕えられ獄に繋がれたが、慶応三年赦された。その後、暫くは不遇で、各地に流寓した。この書状は当時のものであろう。その後、彼は徴士に挙げられ、大津裁判所に出仕し、累進して待詔院判事になっている。

拜啓。春寒之節、上人道躰愈御壯健、御軼掌可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>在奉<sub>三</sub>南壽<sub>一</sub>候。扱、昨年春中在京之節は、時々罷出切迫之相談等仕終始御救助被<sub>レ</sub>下奉<sub>三</sub>厚情感謝<sub>一</sub>候。爾後東京より上・下野邊<sub>しもつげ</sub>飄遊、一事無<sub>レ</sub>成碌々舊面目慙愧不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>言也。昨秋冬、岩倉殿御陪從に而御東下之段承り、即刻龜山邸え御尋申上候處、最早や御出立の迹にて頼支峰先生に拜眉仕、御近狀略承り浣慰仕候。當節も東京近邊に流寓仕居恐々偷<sub>二</sub>殘生<sub>一</sub>居候。故國嫌疑も中々解兼ね殊に近來は大大搜索嚴重に仕居候由、涸轍の蛻生、最早や此迄と奉<sub>レ</sub>存候。尙殘喘<sub>ざんぜん</sub>も候は<sub>レ</sub>不<sub>三</sub>相變<sub>一</sub>御厄介無<sub>二</sub>御見捨<sub>一</sub>様暮々奉<sub>三</sub>祈上<sub>一</sub>候。此度舊親友彦人・大音龍太郎兄、上京幸便ニ付呈<sub>二</sub>一書<sub>一</sub>候、昨年拜別後も兩三度呈書之處、紛亂中、多分滞り勝と奉存候。大音氏は山中静逸・頼支峰様も知人に候間、御序<sub>ついで</sub>も候は<sub>レ</sub>御面晤可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。申上度事は海山に候へ共、書不<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>意草々擱筆。折角道躰御自玉肝要に奉<sub>レ</sub>存候。恐惶頓首

二月十日

勝木魁堂

喝蟾老上人

二白。御序も候は<sub>レ</sub>深見皆山、東光寺同斷、大石龍藏兄にも宜敷様奉<sub>三</sub>祈上<sub>一</sub>候。猶々舊幕人・川勝近江之事件ニ付、近日右丹波領地之者、書面持參可<sub>レ</sub>仕候間、可<sub>レ</sub>然御含置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

この書狀によつても、黙仙がいかにか志士たちを扶け、また頼りにされていたかが察せられる。なお、大音龍太郎とあるのは近江伊香郡の人、儒を以て岡山藩に仕え、藩校の教頭となつた。明治初年、上野国の監察となり、さらに岩鼻具知事となつてゐる。

この書狀にも見えるように、黙仙は明治初年、岩倉具視との関係から、天皇東幸のさい陪從した。東京では頼支峰と共に

に、九段坂下に仮寓した。当時、支峰の門生・田島定邦なるものに与えた五律一首がある。

戊辰、初冬。江城客舎偶感

曾遊如二一夢一

曾遊そういう

一夢の如し

回首百慮生

回首こうべ

首を回らせば 百慮生ず

酒爲忘憂酌

酒は 憂を忘れんが為に酌み

茶依除唾烹

茶は 唾を除くに依て 烹る

閑來世衰盛

閑し来る 世の衰盛

默看吏奸正

默し看る 吏の奸正

窓外城壕近

窓外は 城壕に近く

嗷嗷宿雁聲

嗷々ごうごうたり 宿雁の聲

大意は、かつて忙しく各地を遊歴したことは、もはや一場の夢のようである。回顧すれば、さまざまな思いが胸にふさがる。酒を汲むのは、悲しみを忘れるため、茶を立てるのは怒気を静めるためである。つらつら世の隆替を眺め、心静かに役人の正邪を見つめる。ふと窓外に目をとめると、そこは宮城の内堀に近く、時に宿る雁の聲が、喧しく聞こえる、と。

この年、默仙は還俗して、徴士に挙げられたが、幾ばくもなく翌明治二年、さらに伊勢渡会わた県の少参事に転じた。けれど、岩倉具視の推薦だといわれる。少参事になっても、金輪寺と伊勢との間を往来していたが、明治三年、遇ま東京にお



いて病いを得、この年九月三十日、浅草の病院で没した。享年五十八。諡して默僊院喝蟾望雲くわつぞうといい、北品川の正徳寺（真宗）に葬られた。

〔補注〕

(1) 大橋黙仙の人物

安城信雅編「勤王僧大橋黙仙伝」（稿本）

(2) 梁川星巖「喝蟾上人。要レ余遡三嵐峽。……」五絶句

梁川星巖「鴨沂小隠集」（卷三）。（富長覚夢編

『梁川星巖全集』第二卷、五九四―五九七頁所収）

(3) 回文・錦字

回文は、回文詩。詩の別体で、終りから読んでも、中央から旋回して読んでも詩となり、平仄も韻も適うもの。前秦の蘇伯玉の妻・若蘭じやくらんが、流沙に徒された夫を慕い、錦に織りこんで作った盤中詩がこの始めで、錦字詩ともいう。

(4) 鈞天・広楽

天上で奏する音楽。鈞天は、九天の一つ、上帝の

宮。『列子』『史記』等に故事がある。その一つ、

趙簡子が疾みて夢に天帝のもとに到り、百神と鈞天に遊んで広楽を奏したという。

(5) 宝珠村

保津村。音が似ているところから、高雅な文字に置きかえたもの。宝珠は本来は「ほうしゅ」「ほうじゅ」と訓む。保津村は、丹波国桑田郡（現、京都府保津町）で、大堰川（大井川）が山城国に入る手前の村。

(6) 梁川星巖「九月念三日。発レ京赴三湖東。……」五絶句

梁川星巖「鴨沂小隠集」（卷三）。（『梁川星巖全集』第二卷、六〇二―六〇四頁所収）

(7) 酒鼈

酒器の名、円くて扁平で、水筒のような形をして

いる。

- (8) 梁川星巖「留<sub>三</sub>喝蟾上人<sub>二</sub>夜話」七絶一首

梁川星巖「鳴沂小隱集」(巻五)。(『梁川星巖全

集』第二巻、七二二頁所収) (伊藤信編『梁川星巖  
翁』四一四頁所収)

- (9) 梁川星巖の黙仙宛書簡

金輪寺文書。(『梁川星巖全集』巻五、七七―七

八頁所収)

- (10) 梁川星巖の別便

賀来寿平に宛てた正月六日付(嘉永年間)書簡。

(『梁川星巖全集』巻五、七八頁所収)

- (11) 梁川紅蘭の黙仙宛書簡

金輪寺文書。

- (12) 頼三樹が捕縛される数日前

三樹捕縛の日取については諸説がある。後段、三

項の補注(8)参照。

- (13) 松本奎堂「遊<sub>三</sub>神尾山<sub>二</sub>……」(七律)

金輪寺文書。(森洗三著『松本奎堂』では、第三

句「旧痾」を「旧癖」としてある)

- (14) 藤井竹外「偶書」(七絶二首)

金輪寺文書。『竹外二十八字詩』『竹外詩鈔』等  
には載せていない。

- (15) 森田節斎の黙仙宛書状

金輪寺文書

- (16) 残産

「殖産」の誤字か。

- (17) 金輪寺の聖護院門跡に宛てた歛願書

金輪寺文書

- (18) 中岡慎太郎の黙仙に宛てた書状

金輪寺文書

- (19) 談海槐堂が黙仙に宛てた書簡

金輪寺文書

- (20) 大橋黙仙「戊辰初冬。江城客舎偶感」(五律一首)

金輪寺文書

### 三、三樹と默仙の交流

すでに見たように、亀岡の金輪寺に住職となった大橋默仙は、進んで京洛の諸士と交際したが、当初は梁川星巖を主軸とした詩交であつたらしい。星巖の抱擁圈には三樹があつたので、とうぜん三樹とも交遊が開けた。

三樹との詩交を示すものには、先づ嘉永五年（一八五二）七月十六日、三樹は池内大学を伴なつて、賀茂川畔・木屋町の默仙の仮宅で、名物の大文字焼（如意ヶ嶽の柴焼）を見物した。この時に、三樹の七古がある。

東山大文字点火。與<sub>二</sub>池内陶所<sub>一</sub>看<sub>二</sub>於僧喝蟾宅<sub>一</sub> <sup>(1)</sup>

（東山大文字点火。池内陶所と僧・喝蟾宅に看る）

忽見峯頭生<sub>二</sub>一火<sub>一</sub>

忽ち見る 峯頭 一火を生じ

一火一火萬火燒

一火 一火 万火燒く

烟去火連現<sub>二</sub>大字<sub>一</sub>

烟は去り 火は連なつて 大字現わる

直疑文奎染<sub>二</sub>天輪<sub>一</sub>

直に疑う 文奎の 天輪を染むるか

一畫火餓長萬丈

一画の火餓 長きこと万丈

筆力透<sub>レ</sub>山分<sub>二</sub>波撇<sub>一</sub>

筆力 山に透つて 波撇分かる

傾城快觀齊翹<sub>レ</sub>首

傾城 快觀 齊しく首を翹ぐ

我獨停<sub>レ</sub>杯發<sub>二</sub>感嘆<sub>一</sub>

我れ独り 杯を停めて 感嘆を發す

文豪跡熄詞林海

文豪跡熄んで 詞林は晦く

妖霧昏昏塞筆海

妖霧昏々として 筆海を塞ぐ

怪鬼輩出銜纖巧

怪鬼輩出して 纖巧を銜い

骨力灰燼無眞氣

骨力灰燼して 眞氣なし

名利長蔽智燭明

名利長く蔽う 智燭の明を

心火業薪日燭熾

心火業薪 日に燭熾す

奚焉毫端飛電人

いづくぞ毫端 飛電の人

文彩煌煌燭天地

文彩煌々 天地を燭らさん

猶今宵如山火光

なお今宵 山火の光の如く

萬目瞭焉山河麗

万目瞭焉 山河の麗わしきを

嗚呼我才不<sub>二</sub>如意<sub>一</sub>

嗚呼 我が才 如意ならず

空看如意峰頭大文字

空しく看る 如意峰頭の 大文字

大意は、山頂に近く忽ち一火が点つたと見るや、次々と火は点り、煙は消え火は連なつて、ついに大の字が現われた。

それは、文奎（文章を司る星宿、二十八宿の一）が、あたかも天の文書を筆するがごとく、一面の火勢は万丈の長さ及び。筆勢は山に徹して、筆先は岐れて跳ねている。そのみごとさに、われら一同、陶然として、頭をもたげて凝視した。私はひとり盃において、感慨に堪えなかった。思えば文壇の巨星は世を去つて、文苑に人なく、妖しげな霧が立ちこめて

いる。妖怪が我がものの顔で、徒らに技巧を誇り、筆力・気力は失なわれた。功名と利欲にとらわれ、叡智の光は鎖されている。奸物のよこしまな火のみ、大きな薪の燃ゆるごとく、日々に燃え盛っている。しかし、どうにかして精気ある筆力の人を起こして、文苑に光をかがげ天地を照したいものだ。あたかも今宵の大文字の火のごとく、山河のすみずみまでも麗わしく照らしたいものだ。しかるに私の才能では、意あって力足らず、手をこまねいて如意嶽にかかる大文字を、空しく眺めるのみである、と。

次は、この翌年、すなわち嘉永六年（一八五三）十月六日、三樹は默仙と共に、入京したばかりの松橋雲津（諱は純真、字は拙甫、別号は江城）をともない、梁川星巖の誘いで東山の名勝に遊び、帰途に糺の森<sup>なす</sup>を経て、さらに鴨川の上流・山鼻の平八茶屋<sup>8</sup>に宴遊している。この時、星巖に八絶句がある。

十月六日、拉<sup>二</sup>子春拙甫<sup>一</sup>、歴<sup>三</sup>遊東山諸名區<sup>一</sup>。歸途飲<sup>二</sup>山鼻水亭<sup>一</sup>。往來得<sup>二</sup>八絶句<sup>一</sup>。(4)

（十月六日、子春・拙甫二子、喝蟾上人を拉して、東山の諸名区を歴遊す。帰途、山鼻の水亭に飲む。往来、八絶句を得たり）

一

淫雨 兼句 坐<sup>レ</sup>拄<sup>レ</sup>頤

淫雨 兼句 坐して頤を拄<sup>あごをささ</sup>う

新晴 急出 拽<sup>二</sup>筇枝<sup>一</sup>

新晴 急ぎ出でて 筇枝<sup>きようし</sup>を曳く

丹楓 金菊 夾<sup>二</sup>山路<sup>一</sup>

丹楓 金菊 山路を夾む

不信 秋過 多子時

信ぜず 秋過ぎて 多子<sup>たし</sup>の時なるを

一一

一寺過來又一祠  
也沿野店竚多時  
每逢牆壁塗鴉遍  
不枉腰間墨斗兒

一寺過ぎ来りて又一祠  
また野店に沿うて竚むこと多時  
牆壁に逢うごとに塗鴉とあして遍ねし  
枉げず腰間の墨斗ぼくとじ兒を

三

半山樓閣影重重  
紅樹白雲多麗容  
中有故人新墓在  
眞如堂下悵停筇

半山の樓閣影重々  
紅樹白雲麗容多し  
中に故人の新墓の在る有り  
眞如堂下悵として筇はしを停む

竹桐山人墓。在山中

四

仙隱遺踪何處尋  
谿銜行盡入嶽岑  
白雲幽石依然在

仙隱の遺踪何の処にか尋ねん  
谿銜かんが行き尽して嶽岑きんしんに入る  
白雲幽石依然として在り

一壑松風千古心

一壑の松風 千古の心

白幽子はくゆうし舊棲。在白川山中。所謂松風窟者、即此。

五

一場富貴夢驚回

一場の富貴 夢 驚き回らせば

第邸連雲安在哉

第邸 雲に連りしも 安くにか在るや

大李將軍留粉本

大李將軍 粉本を留む

夕陽金碧小樓臺

夕陽 金碧の 小樓台

銀閣寺

六

浮世功名東逝波

浮世の功名は 東逝の波

欽君高踞寄山河

欽す 君が高踞して 山河に寄るを

村名舊是一乘寺

村名 もと是れ 一乘寺

正好呼爲凹凸窠

正に好し 呼んで 凹凸窩と為すに

詩仙堂。名畫記云。張僧繇、書一乘寺壁。遠望加凹凸。名凹凸窩。俗呼其寺曰凹凸寺。

七

細逕如<sub>レ</sub>蛇入<sub>レ</sub>草行  
 殘霞一綫界<sub>レ</sub>溪明  
 山僧廬舍不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>處  
 黃葉滿<sub>レ</sub>林幽鹿聲

細逕<sup>さいけい</sup> 蛇の如く 草に入りて行く  
 殘霞 一綫 溪を界<sup>か</sup>し明らかなり  
 山僧の廬舍<sup>ゐしや</sup> 処を知らず  
 黃葉 林に満ちて 幽鹿の声あり

八

旗亭宛在<sub>二</sub>水之頭<sub>一</sub>  
 樹樹霜紅夾<sub>二</sub>碧流<sub>一</sub>  
 打<sub>二</sub>破慳<sub>一</sub>囊沾<sub>二</sub>一醉<sub>一</sub>  
 不堪負<sub>二</sub>此滿溪秋<sub>一</sub>

旗亭 宛も 水の頭<sup>はしら</sup>に在り  
 樹々 霜に紅にして 碧流を夾む  
 慳<sup>けん</sup>囊<sup>のう</sup>を打破して 一醉<sup>かず</sup>を沽う  
 堪えず この滿溪の秋に<sup>おも</sup>負くに

山鼻

大意は、第一首は、十日あまりも、じめじめ雨が降り続いたので、坐わりこんで顎をささえ、所在なさを託っていた。今日は新しく晴れたので、いそいそと家を出で、杖をひいて行く。楓は赤く色づき、黄なる菊が、山路をはさんで美しい。まだ秋の半ばを過ぎたばかりだとは、とても信ぜられぬくらいだ。

第二首は、寺社の門前を幾つも過ぎ、また茶店にも暫く休んだ。土塀に出あうと、下手な文字を落書きして歩く。持っ



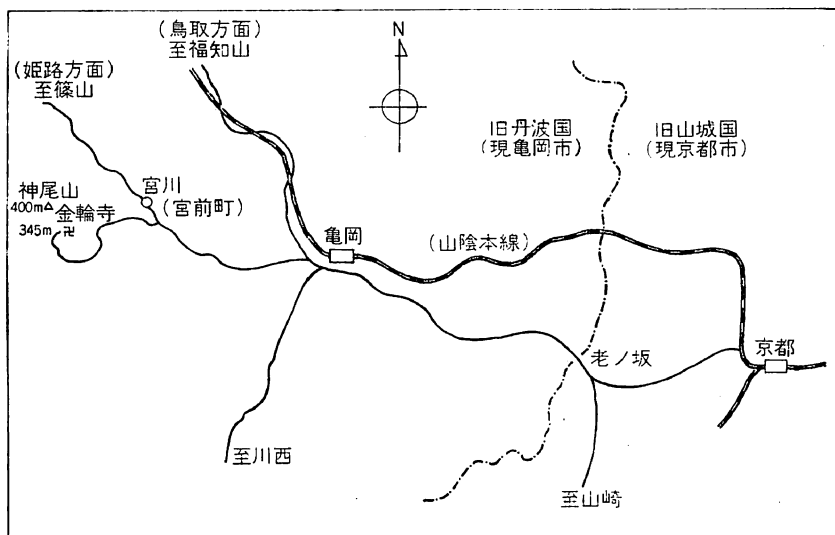
て来た腰のやたても、無駄に使いはしなかった。

第三首は、桜閣の影は山の半ばまで重なりあい、紅樹と白雲に対映して美しい。あのあたりに、中林竹洞の新墓があるのだ。彼を悼んで、真如堂の前で杖をとどめた、と。なお、中林竹洞は、諱は成昌、字は伯明。頼山陽の友弟で、南画の大家であった。嘉永六年（一八五二）三月病没、享年七十八。

第四首は、白隠禪師（臨濟禪の復興者。洛東白川に幽棲して、明和五年十二月病没、享年八十四）の遺踪は、どの辺りか尋ねてみたい。大きく開いた谷を行きつくすと、今度は険しい峰である。白雲・幽谷は昔ながらで、谷底から吹き流れる松風に、白隠が愛した悠久の趣がある、と。なお、白隠の蹤跡は仙に類するもので、種々の考証が行なわれているが、今は白川山中に宝永六年（一七〇九）に建てた碑がある。

第五首は、足利將軍の驕奢も、一場の夢が驚き醒めると、かつて雲に連なっていたと見られる邸宅も跡かたもない。ただ銀閣寺のみは、あたかも唐の大季將軍（李思訓。左武衛大將軍の略称。よく全碧の山水を画いた）が、画の粉本（よんぽん）下書き。手本）のために留めておいたかとも思われる。その銀箔の小桜閣は、夕陽に照り映えて、きらきらと輝いている。

第六首は、石川丈山（諱は重之）は、初め徳川家康に仕えて大阪役には先陣の功を立て、その目覚ましい働きに人眼を聳たせたが、いわゆる浮世の功名は東逝の波にも似て、まことにはかないものである。それよりも、彼が高踏勇退して、山河の仙境を卜し、優游として自適した風容こそ、敬まうべく慕わしいものだ。彼が幽棲の地・詩仙堂は、もと一乗寺村といった。彼は一ひとの字を凹くぼというが、その幽棲の地も峰と谷とが入り交って凹凸を成している。『歴代名画記』（清・李清植編。全八巻）によれば、かつて梁の画家・張僧繇（ちやうそうぎやう官は右軍將軍、呉興の太守）が、彼地の一乗寺の壁に題して、凹凸窩、凹凸寺と名づけたが、わが一乗寺の詩仙堂も、そのたたずまいから凹凸窩と呼ばれても不思議はない。



亀山金輪寺案内図 (京都市亀山市宮前町宮川上王山)

第七首は、細い山路を辿って行けば、その路は蛇が草に入っ  
て行くように、くねくねと続いている。ふと見れば、溪を境に  
して夕焼が、ひとすじ明るく映えている。俊寛僧正がいたとい  
う草庵は、今は尋ねるに由もない。ただ黄葉した林から、かす  
かに鹿の声が聞こゆるのみである。

第八首は、山鼻の旗亭、平八茶屋は、高野川に臨んでいて、  
河岸の樹々は霜に飽いて紅葉し、碧流をさしはさんでいる。平  
素は引き緊めていた財布の紐をほどいて、酒の酔いを買いたく  
なるのは、この川岸一帯の秋色に負きたくないからである、と。

越えて安政三年(一八五六)五月、池内大学が黙仙に宛てた  
書簡に、三樹のことが出ている。

其後は契濶打過候、薄暑之候、愈々御多祥御法務珍重奉  
存候。蝸庵無事、御放慮可被下候。先頃は御轉任の由、  
星翁(梁川星巖)に承り候。珍重の至奉賀候。近來御出  
京は如何奉待候。去月は海屋(貫名海屋)と保津を登り候

筈の處、無<sup>レ</sup>據用事にて相止候。殘念千万に候。三樹も兩三日前、新婚の由承り候。扨僕、當春東行、何歟雜費も有<sup>レ</sup>之不經濟の至に御座候。就ては彼の佛山堂詩抄、代物金壹兩壹分、何卒早速御送金被<sup>レ</sup>下候様希候。上人御受持の分<sup>ちやうど</sup>埒明候はゞ、惣會計皆濟に相成候。何卒其邊御察憐、當月中に御授與希候。平生ならば工夫も御座候へ共、東行歸後前後の仕合御推怒可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候、大俗事汚<sup>二</sup>高聞<sup>一</sup>御海容被<sup>レ</sup>下度候。餘は後便申殘候。時氣御保護專一候。勿々頓首。

五月廿一日

池内大學

喝蟾上人法座下

ここでは三樹の新婚に觸れているが、三樹はこの年の春、丹波篠山の医・八木玄迪（字は伯仁）の三女・君子を妻として迎えている。時に君子は十八歳、実は前から妹の民子と共に頼家に在って、君子はすでに内縁關係にあったという。三樹の母・梨影（頼山陽の未亡人）が亡くなったのを機に、正式に妻に直したといわれている。

安政五年（一八五八）に入ると、井伊直弼の暴政によって、志士たちの動きも活発となった。この年九月二十二日、三樹は縛に就いたが、<sup>(8)</sup>その数日前、黙仙に書状を以て松本奎堂を紹介している。<sup>(9)</sup>

先日、松輩被<sup>まつたけ</sup>下、其節禮書呈上候節、星翁（梁川星巖）之訃音申上候。定て相達候半と奉<sup>もつ</sup>存候。其節は御不快、未だ御全快無<sup>レ</sup>之よし、其後如何。然ハ此人三州刈屋藩にて松本謙三郎と申者に御座候。私學友にて頗る人に御座候。今般天橋見物旁、貴邊遊歴被<sup>レ</sup>致事と相成候に付、貴寺へ御留メ置被<sup>レ</sup>下、御近辺御用旋願上候、萬事は同人より御聞取希上候。略書勿々。

九月十四日

頼三樹三郎

丹州宮川

神尾山金輪寺様

この書簡にあるように、奎堂はたしかに頗る人物であった。もと昌平黌に在って才名高く、好んで豪俠と結び、後に天誅組を結成して大いに幕軍と戦った。三樹との関係についていえば、三樹はかつて羽倉簡堂の被護を受けたもの、奎堂も簡堂の塾に入って、その塾頭まで勤めている。いわば共に簡堂と浅からぬ因縁があり、あい許す機縁もここにあったのではあるまいか。

なお、松本奎堂が、この三樹の紹介状を持って金輪寺に遊び、黙仙に呈する七律を作ったことは、すでに前項で記したところであるが、『奎堂遺稿』（刈谷士族会編）には、奎堂の「丹波道中作」<sup>四〇</sup>と題する七絶一首が載せてある。この中に「満山風雪滞三丹州」の句があるので、この年の冬期は丹波に在って、大獄の難を避けたのではあるまいか。

すでに見たように大橋黙仙は、その交遊の範圍より推察すれば、やはり豪宕な人物であったと思われる。この故に、丹波の山奥にある金輪寺は、志士たちの隠れ家でもあったらしい。今日、金輪寺を訪ねて見ると、庫裡や本堂は建て直されて新しくなっているが、庫裡の裏手にあって、庫裡とは渡り廊下で通じている離れの一棟は昔のままである。そして、ここが志士たちが匿まわれた所といわれ、建物は老朽化が甚しいにも拘わらず、旧蹟を毀却するには忍びないからと、そのまま保存されている。

この離れの一棟は、階下は土間で物置に使われているが、庫裡に通ずる二階には、二間続きの座敷があって、「紫翠山

房」と名づけられている。壁間には、今も三樹の揮毫が掲げられていて、この座敷に三樹をはじめ志士たちが起居したといわれる。この裏手は鬱芻たる山林にかこまれ、隠れ家といった感じに相応わしい。

このように、金輪寺のたたずまいを見、黙仙と志士たち、殊に三樹との交流の跡をたどる時、三樹との並々ならぬ関係が推知される。

〔補注〕

- (1) 頼三樹『東山大文字点火。……』七古

真田秀吉編『頼三樹詩集』五二―五三頁。木崎好

尚著『頼三樹伝』二一一―二二二頁。

- (2) 糺ノ森

現在の京都市左京区下鴨、下賀茂神社の南境の森。

ここに古廟があって、糺森明神（河合神社）という。

- (3) 山鼻の平八茶屋

山鼻は、山城国愛宕郡山端村（現、京都市左京区

山端）。その高野川に臨むところに、平八という水

茶屋（川魚料理）がある。頼山陽も文政三年十月、

ここに遊んで「遊三山鼻」七律を賦している。

- (4) 梁川星巖「十月六日。拉三子春・拙甫三子、喝蟾上人」

……」八絶句

梁川星巖『鴨沂小隠集』（卷三）。（『梁川星巖

全集』第二卷、六二二―六二六頁所収）

- (5) 塗鴉

なすり描いた鳥のように見える字。金釘流。

- (6) 慳囊

吝嗇者が常に金銭を囊中に貯えて、出し吝しみます

ること。「慳」は、をしむ。やぶさか。

- (7) 池内大学の黙仙宛書簡

金輪寺文書

- (8) 頼三樹の就縛

三樹の就縛の日取については諸説がある。真田秀

掘って敘述を進めた。

吉撰「頼鳴崖先生」(『頼三樹詩集』一頁所収)では

(9) 頼三樹が黙仙に宛て松本奎堂を紹介した書状

安政五年九月二十二日。木崎好尚撰「頼三樹日譜」

金輪寺文書

(『頼三樹伝』四九九頁所収)でも九月二十二日で

(10) 松本奎堂「丹波遊中作」(七絶)

あるが、森洗三著『松本奎堂』では十一月晦日、頼

青苔埋<sup>レ</sup>骨定何丘。天使<sup>三</sup>詞人老<sup>三</sup>薄遊。阮籍窮<sup>レ</sup>途

成一編『維新史料綱要』では、十二月一日としてあ

空一哭。滿山風雪滯<sup>三</sup>丹州。『奎堂遺稿』巻下、一

る。思うに未だ明かにすべき基本資料は、発見されて  
いないようである。ここでは仮に真田・木崎説に

五丁。(松本奎堂著、薄井龍之校)

## 四、金輪寺の墓碑

大橋黙仙が、頼三樹が非命に斃れたのを聞き、その招魂碑を金輪寺に建てようとしたのは、以上のような関係に鑑みれば、無理のないところであろう。しかし、当面は幕譴を慮って、暫く静観していたが、前述(第一項)したように文久二年(一八六二)十二月、その筋より頼支峰に宛て、三樹の罪を宥免する旨の達しがあったので、黙仙はこれより直ちに行動を起こした。その結果は、その翌年(文久三年)六月、金輪寺の境域に三樹の墓碑は建立せられた。

この墓碑の位置は、本堂に向かって右手の奥、後ろは山を背負い、片側は深い谷に臨んでいる。金輪寺のある神尾山は、いわゆる丹波の山なみで、標高は約四百メートルながら、雲海の美しい所である。かつて修験道の寺として、本山修験宗

を称えていたそうであるが、この環境を見れば領かれる。ところで頼三樹は、特にこの雲海を愛したという。したがってその墓碑は、最もよく雲海の見える位置を選んで建設されている。

頼三樹の墓碑は、表面には「頼君三樹處士墓」と刻せられ、左側面には「安政六己未十月七日」と命日が、裏面には次のような絶命詩が刻せられている。

獄中作<sup>(1)</sup>

排<sub>レ</sub>雲欲<sub>二</sub>手掃<sub>二</sub>妖熒<sub>一</sub>

失脚墜來江戸城

井底痴蛙過<sub>二</sub>憂慮<sub>一</sub>

天邊大月缺<sub>二</sub>高明<sub>一</sub>

身臨<sub>二</sub>鼎鑊<sub>一</sub>家無<sub>レ</sub>信

夢斬<sub>二</sub>鯨鯢<sub>一</sub>劍有<sub>レ</sub>聲

風雨他年苔石面

誰題日本古狂生

雲を排して 手づから妖熒を掃わんと欲す

失脚 墜ち来る 江戸の城

井底の痴蛙 憂慮に過ぎ

天辺の大月 高明を欠く

身は鼎鑊に臨みて 家に信なく

夢に鯨鯢を斬りて 劍に声あり

風雨 他年 苔石の面

誰か題せん 日本の 古狂生

大意は、雲を押し分け、天に上って、この手で妖しき星を取り除こうとした。しかるに、足を踏みすべらせ、所もあるうに江戸城の真中に墜ちてしまった。考えて見れば、幕府の執政どもが徒らに外夷を怖れているのは、井の中の蛙の愚に

も似ている。それにつけても、あたかも天空にかかる大月が、妖雲に妨げられて光を欠くようなもので、朝廷の御稜威が幕府のために損なわれているのは残念である。自分ではや刑に処せられようとしている、家からの音信も聞くことができない。しかし、夢では鯨鯢のごとき大魚を斬って、わが剣は豁然として高鳴った。あたかも外夷を誅殺し、国難を払い退けた感じである。わが死しての後、風雨にさらされる苦むした墓石の上に、日本の古狂生と誰が題してくれるであらうか、と。なお、古狂生とは、『論語』に「古の狂や肆<sup>し</sup>、今の狂や蕩<sup>もう</sup>」（陽貨篇）とあって、今の狂生はただじだらくであるが、古の狂生は小節にこだわらぬ志の確かなものがあつたというもので、三樹は狂でも古の狂生を以て任じていたわけである。

また、この三樹墓碑の碑側には、この絶命詩の跋として、兄の支峰が撰した次のような識語<sup>しぜ</sup>が刻せられている。

金輪寺僧喝蟾師、予兄弟方外友也。頃爲亡弟立此碣<sup>こつ</sup>、使<sup>レ</sup>予書<sup>ニ</sup>其絶命詩<sup>一</sup>。予感師厚誼、乃應<sup>レ</sup>囑而書。

頼復

（金輪寺の僧・喝蟾師は、予が兄弟の方外の友なり。頃ろ亡弟の為に此の碣を立て、予をして其の絶命詩を書せしむ。予、師の厚誼に感じ、乃ち囑に応じて書す）

これによれば、三樹の絶命詩は支峰が揮毫したのである。また後尾には、「宅間久次鐫<sup>はる</sup>」と、石工の名が記されている。なお、宮前村<sup>みやまき</sup>の古老の言い伝えでは、この墓碑に納められているのは、三樹の遺体の一部であると。すなわち、三樹が斬に処せられた時、偶ま黙仙も江戸に在って、遺体の一部を盗み取り、持ち帰って埋葬したとのこと。しかし、金輪寺にそ



うした記録はない。

金輪寺に三樹の墓碑が建設されるや、その三カ月後、三樹の兄・支峰は、あらためて同寺へ赴き、三樹の墓碑を展し、次のような弔詩を賦している。

癸亥六月、神尾山上亡弟子春碑成。九月、展墓書<sub>レ</sub>感、以呈<sub>三</sub>山主喝蟾師<sub>一</sub>。(2)

(癸亥<sub>きがい</sub>六月、神尾山上に亡弟・子春の碑成る。九月、展墓して感ずるところを書し、以て山主・喝蟾師に呈す)

吾弟死<sub>三</sub>奇禍<sub>一</sub>

吾が弟 奇禍に死し

鵠原隔<sub>三</sub>幽冥<sub>一</sub>

鵠原<sub>れいげん</sub> 幽冥を隔つ

鬱結不平恨

鬱結す 不平の恨

吾懷何時寧

吾が懷い 何時か寧<sub>やす</sub>からん

偷安日月逝

偷安<sub>とあん</sub> 日月逝き

不<sub>レ</sub>拔眼中釘

抜けず 眼中<sub>てい</sub>の釘

碧血収不<sub>レ</sub>得

碧血 収むるを得ず

何以慰<sub>三</sub>遺靈<sub>一</sub>

何を以てか 遺靈を慰めん

蟾師重<sub>三</sub>舊誼<sub>一</sub>

蟾師<sub>まんし</sub> 旧誼を重んじ

立<sub>レ</sub>碣向<sub>三</sub>山庭<sub>一</sub>

碣<sub>けつ</sub>を立てて 山庭に向かい

鐫<sub>三</sub>汝絶命詩<sub>一</sub>

汝が絶命の詩を鐫<sub>せん</sub>し

招<sub>レ</sub>魂供<sub>二</sub>綠醺<sub>一</sub>魂を招いて 綠醺<sub>りよくれい</sub>を供す掃葉展<sub>二</sub>墓下<sub>一</sub>

葉を掃うて 墓下に展せば

音容恍<sub>二</sub>視聽<sub>一</sub>

音容 視聽 恍たり

感慨憶<sub>二</sub>往事<sub>一</sub>

感慨 往事を憶い

不<sub>レ</sub>覺暗涕零覺えず 暗涕<sub>お</sub>零つ當時死<sub>二</sub>横獄<sub>一</sub>

當時 横獄に死せしも

義烈姓名馨

義烈 姓名馨ばし

天回<sub>二</sub>日月光<sub>一</sub>

天 日月の光を回らし

能照黃泉汀

能く照らさん 黃泉<sub>なぞ</sub>の汀

蟾師義亦厚

蟾師の義 亦厚し

嗟汝目可<sub>レ</sub>瞑

嗟 汝が目 瞑すべし

大意は、わが愛する弟は、思いがけない禍いに斃れ、悲しくも幽界と明界とに別かれて、現世では再び会うことができない。わが鬱屈した恨めしさは、いつになれば晴れるであらうか。一時の安きを貪っているうちに、歳月は容赦なく流れ去って行くが、眼の中の釘ともいうべき邪魔ものは、まだ取り除くことができないでいる。弟が血を以て購った志は、未だに遂げるに至っていないので、どうして靈魂を慰めたらよからうか。ところが、喝蟾師は弟との旧交を重んじ、今や石碑を境内に立てて、これに弟の絶命詩を刻み、魂を呼び起こして、好物の美酒を供えた。また、葉を掃って墓前を清め、

その前に丁重にぬかずいた。その声や姿、これを聞き、これを眺むれば、そぞろに往事が思い出されて、人知れず涙が流れ落ちる。弟は非命に斃れたが、正義の心の堅いことは、世に隠れもなく、今に芳香を放っている。天はその配剤の妙をもつて、必ずや黄泉の渚にも光をあてるであらう。喝蟾師の好誼も、かくも濃厚なものがあるので、わが弟も安んじて瞑目するに違いない、と。

このさい支峰は、黙仙に対しても交誼を謝して、次のような七律を贈っている。

訪<sub>二</sub>喝蟾上人<sub>一</sub> <sup>(3)</sup>

(喝蟾上人を訪う)

欲<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>舊約訪<sub>二</sub>禪關<sub>一</sub>

竹杖穿過山復山

驚<sub>レ</sub>客奇巖横<sub>二</sub>逕曲<sub>一</sub>

號<sub>レ</sub>風老樹聳<sub>二</sub>雲間<sub>一</sub>

記<sub>レ</sub>遊愧<sub>二</sub>我無<sub>二</sub>神筆<sub>一</sub>

識<sub>二</sub>字有<sub>二</sub>僧同<sub>二</sub>醉顏<sub>一</sub>

詩就示<sub>レ</sub>君君已睡

默仙山上月彎彎

旧約を追わんと欲して 禪関を訪う

竹杖 穿ち過る 山また山

客を驚かして 奇巖 逕曲に横たわり

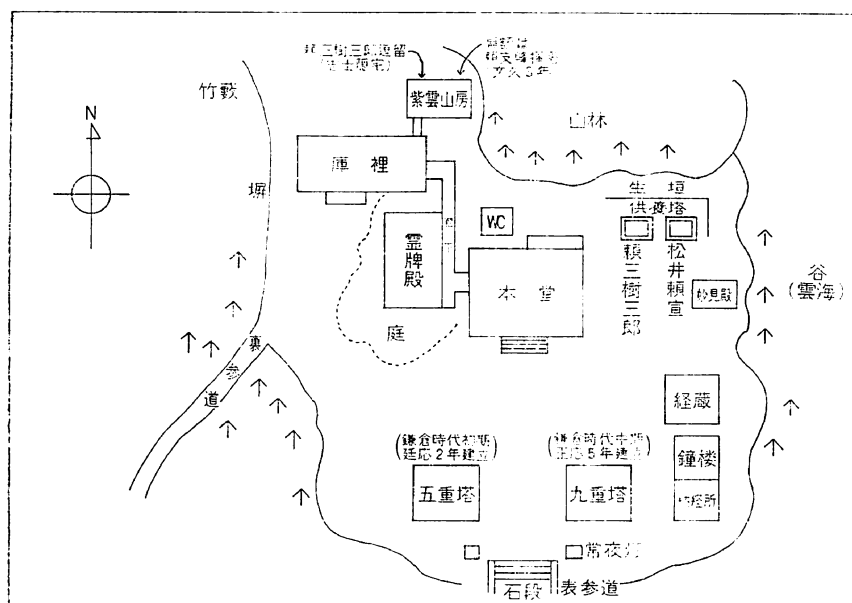
風に号<sub>まじ</sub>んで 老樹 雲間に聳ゆ

遊を記する 我れ神筆なきを 愧<sub>ず</sub>るも

識<sub>し</sub>字 僧と醉顔を 同<sub>とも</sub>にする有り

詩就つて 君に示せば 君すでに睡る

默仙山上 月 彎々<sub>わんわん</sub>



亀山金輪寺見取図——神尾山（上王山）の南腹

大意は、かねての約束にしたがって、金輪寺を訪ねよう  
 と思い、竹の杖をたよりに、山道を上りに上った。曲り角  
 には、眼を驚かせるような奇岩があるし、老樹が風に吹か  
 れて鳴る音は、雲間に囁々と響いてくる。このような仙境  
 を、在りの俚に伝えるには、わが筆の力の拙いのが悔まれ  
 る。しかし、喝蟾師に迎えられ、詩律を酒間に論ずれば、  
 わが心は洵然として和らいでくる。ようやくにして詩が出  
 来たので、これを同師に見せようとすれば、同師はすでに  
 心地よげに睡っている。その横になった姿を、山にたとえ  
 れば、今宵の月はまさに弓なりの峰々を照し出している  
 と。

ところで、金輪寺で三樹が起居していた建物は、すでに  
 記したように庫裡の後方、別棟の二階座敷である。ここが  
 「紫翠山房」であるが、この座敷にかけてある「紫翠山房」  
 の横幅は、頼支峰が揮毫している。それは、「紫翠山房」  
 癸亥之秋書。支峰頼復」とあるもので、癸亥は文久三年で  
 あるから、この年六月、支峰が三樹の展墓を初めてした時

の揮毫でもあろうか。

因みに、金輪寺には頼山陽の遺墨もある。それは「横<sup>へん</sup>空盤<sup>ばん</sup>硬」と題した南面の山水幅に、七絶<sup>(4)</sup>を賛したものである。おそらく黙仙がつてを求めて、どこからか購入したものであろう。支峰は文久三年六月、この大幅を見せられて、その余白にさらに題詩を添えている。

明けて元治元年（一八六四）、支峰は黙仙と梁川紅蘭（星巖未亡人）とを、頼山陽の故宅・水西荘に招き、さかに飲飲している。おりから、隣家の桜が満開であったので、これを賞しながら、次のような七絶を賦している。

鄰櫻盛開。時招<sup>ニ</sup>紅蘭・黙仙<sup>ニ</sup>氏、小酌。<sup>(5)</sup>

（隣桜、盛んに開く。時に紅蘭・黙仙<sup>ニ</sup>氏を招いて、小酌す）

落花風裏日如<sup>レ</sup>年      落花 風裏 日<sup>わ</sup>年の如し

隔<sup>レ</sup>水山光到<sup>ニ</sup>酒邊      水を隔てて 山光 酒辺に到る

清福從來嫌<sup>ニ</sup>獨領<sup>一</sup>      清福 從來 獨領<sup>どくりやう</sup>を嫌う

招<sup>ニ</sup>將<sup>下</sup>佳友<sup>ニ</sup>共<sup>中</sup>觥船<sup>上</sup>      まさに佳友を招いて 觥船<sup>かうせん</sup>を共にせんとす

大意は、桜花が風に吹かれて散り落つる、その無常にして迅速なるさまは、あたかも一日が一年のごとく、往事がそぞろに偲ばれる。鴨川をへだてて、東山の反射光が、この盃の上にも照り映えている。いったい清福なるものは、独占すべきものではない。よき友人を招いて、大盃を共にした次第である、と。

これを見れば、支峰と黙仙との交流は、いよいよ深きを加えていたようである。ともあれ、丹波の山奥にある金輪寺に、三樹の招魂碑があることから、その関係が尋常でないのは当然であろう。

なお、黙仙と金輪寺の関係を言えば、晩年の黙仙は、当時の本山である聖護院（総本山は三井寺）に対し隱居願を出し、慶応二年二月十七日を以て聴許せられた。しかし、後住が未定のため、明治になってからも、何かと同寺の世話をしていた。後住が決定したのは、黙仙が病没して四年後、明治七年のことであった。現在の住職は加来徳泉氏で、大橋黙仙から数えて七代目、本稿も同氏の御高配に俟つことが大きい。末筆ながら、深く感謝の意を表する。

# 〔補注〕

## (1) 三樹の絶命詩「獄中作」

小塚原回向院と、松陰神社の墓碑の側面にも、この詩が刻まれている。なお、世に伝わるこの詩には、字句に若干の異同がある。石津灌園の『灌園遺稿』

では、第一句の「排雲」が「排空」に、第七句「苔

石面」が「苔石表」になっている。真田秀吉編『頼

三樹詩集』でも、第七句は「苔石表」である。『殉

難餘稿』でも、第一句は「排空」である。木崎好尚

編『頼山陽全書』では、第五句「身臨三鼎鑊」が、

(2) 頼支峰「癸亥六月、神尾山上亡弟・子春碑成。……」

五古一首

『頼山陽全集』下巻、七七〇―七七二頁。

(3) 頼支峰「訪三喝蟾上人」七律一首

揮毫は金輪寺所藏

(4) 頼山陽の山水面に自賛の七絶一首

『山陽詩鈔』に「題畫」と題した七絶二首の一で、

「文章已愧老彫蟲。何暇含毫學畫工。此筆慣爲三

「身從三鼎鑊」である。『英烈遺事』では、第六句

「夢斬三鯨鯢」が、「夢破三鯨濤」である。

盤硬語。試描ニ層巘ニ勢横レ空」(文章、すでに愧づ、彫虫に老ゆるを。何の暇ありて、毫を含んで画工を学ばん。この筆、盤硬の語を為るに慣る。試に層巘を描きて、勢い空に横たわる)。文政三年(頼山陽四十一歳)の作である。

(5) 頼支峰「鄰櫻盛開。……」七絶一首

金輪寺文書。(伊藤信編『梁川星巖翁』五一八頁所収)